今年の夏学期の演習で、フレドリック・ジェイムソンの「全体性の詩学」（“The Poetics of Totality”）という論文を読んだ。ウィリアム・カーロス・ウィリアムズの『パターソン』を――ジェイムソン自身はそういっていないが――「価値形態論」（マルクス）として読んでいるところが、とくにおもしろかった。ジェイムソンは「シンボル」という語をヘーゲル的な意味で用いており、そのため、彼の導入するシンボルとアレゴリーの対立は、「総体的または拡大せる価値形態」と「一般的価値形態」の対立に対応することになる（それゆえ、脱構築批評以後すっかりスタンダードなものとなった、全体化作用をもつシンボルとそれを掘り崩すアレゴリーという対立関係は、逆転されている）。ヘーゲルによれば「［古代エジプトでは］オシリスはナイル川と太陽をあらわし、太陽とナイル川は人生を象徴する。三つのそれぞれが意味でもあればシンボルでもあって、シンボルが意味にかわり、それにつれて、意味のほうがシンボルのシンボルとなる。像ととらえられたものが同時に意味ともなる……」（『歴史哲学講義』）。「太陽」は意味するもの（「シンボル」、相対的価値形態）にもなれば、意味されるもの（「意味」、等価形態）にもなる。この反転と価値表現の連鎖は無限に拡大していく。シンボルの世界がこの「拡大せる価値形態」であるとすれば、『パターソン』の「アレゴリー構造」は一種の「一般的価値形態」である。ウィリアムズの詩のなかでは、あらゆる人物はパターソンという一人物の想像力の「虚構的産物」とされるが、これは、一商品である「亜麻布 20 エレ」がほかのすべての商品に対して「一般的等価形態」の位置に置かれるのと構造的に同じである。だから「亜麻布」がほかのあらゆる商品の「一般的等価」物でありながら、なおかつそれ自体一商品であるように、パターソンという人物は「全体性」を「象徴」するものでありながら、なおかつひとりの人物として、詩の中で、車を運転したり、情事を行ったりする。ウィリアムズの詩における「全体性」は、シンボルにおける象徴するものと象徴されるものとの無限の反転運動を、「アレゴリー構造」によって「妨げる」ことで成立する。

「全体性」をめぐる議論には、たとえばこのようなシンボルとアレゴリー、「拡大せる価値形態」と「一般的価値形態」といったかたちであらわれる敵対関係（アンタゴニズム）に関する認識が不可欠ではないか――私は座談会や合評会でそう主張したかったのだろうと、いまになって思う。つまり、この敵対関係――カント的にいえば（「拡大せる価値形態」の無限性を特徴づける）「数学的崇高」と（「一般的価値形態」における「一般的等価」物の例外性を特徴づける）「力学的崇高」との差異に対応し、またそれゆえに（ジョアン・コプチェクの議論をふまえれば）ラカンの「性別化の定式」における「女性的」と「男性的」の差異に対応するこの敵対関係――こそが「普遍＝リアル」なのだ、と。ジェイムソンは、そのモダニズム論およびポストモダニズム論において「全体性」の問題とのからみで「崇高」について語ることを忘れていないが、私にとって不満なのは、そこでは「数学的」と

「力学的」の区別が抜け落ちていることである。それは「性的差異」を無視することに等しい。「性的差異」を、「全体性」およびそれと無関係ではない「普遍性」をめぐる議論のなかに導入することが、この研究プロジェクトにおいてひとまず私のできることであり、今回の合評会でそれを再認識できたことは幸甚であったと思う。